「附錄」田邊朔郎博士六十年史年譜

文久元年　1861　一歳

十一月朔日、東京市に生る。

文久二年　1862　二歳

八月、父孫次郎氏死去す。

慶應元年　1865　五歳

五月、大久保敬齋に就き漢學を、福地源一郎氏に就き佛語を學ぶ。

明治元年　1868　八歳

四月、王政維新の後をうけ戊辰の變亂にあひ、東京より遁れ、府下鷲の森にて一揆の出没に會す。

明治二年　1869　九歳

三月、東京に歸還し八丁堀に滯留、其後沼津に移る。沼津小校學に入學す。

明治五年　1872　十二歳

三月、東京に歸住し湯島天神町に卜居し、湯島共慣義塾にて英漢數の學を修む。

明治六年　1873　十三歳

九月、歐米派遣中の岩倉全權大使歸朝、一行中の叔父田邊太一氏を横濱に出迎ふ。

明治七年　1874　十四歳

四月、祖母八十四歳にて死去す。

明治八年　一八七五　十五歳

五月、工學寮小學校へ入學す。

明治十年　一八七七　十七歳

四月、工部大學校へ入學す。

明治十二年　一八七九　十九歳

五月、合點特別一等賞を授けらる。

明治十四年　一八八一　二十一歳

十月、京都に旅行して琵琶湖疏水路を踏査し實測の準備をなす。

明治十六年　一八八三　二十三歳

五月十五日、工部大學校卒業、工學士の學位を授けらる。二十二日、京都府御用掛被申付、取扱準判任官月俸四拾圓。二十三日、右手中指手術のため東京大學病院へ入院。

七月三日、退院。二十七日、京都着。琵琶湖疏水線路實測、及び工事計畫に着手す。

九月二十日、勸業諮問案取調委員被申付。二十九日、滋賀縣柳ヶ瀬へ出張。

十一月十九日、北垣府知事に隨行して東京出張。

明治十七年　一八八四　二十四歳

二月六日、疏水工事用にて內務省御雇テレーケ氏來る。十四日、宮津街道調査のため丹波出張。

五月二日、東京出張。七日、土木局出頭。二十三日、太政官會議の説明に出頭。二十六日、疏水事業の計畫　叡聞に達す。
七月十九日、京都市上下京區聯合區會開會、疏水工事の計畫を説明す。原案可決。
九月三十日、東京出張。
十月一日、内務省にて計畫の打合をなす。十日、琵琶湖疏水視察。

明治十八年　1885　二十五歳

一月九日、聯合區會に於いて滋賀縣大阪府に對し豫防工費支出を要する理由の説明をなす。原案可決。
二月八日、京都發。十二日、鯖山隧道着。小野田セメント工場を取調べて二十三日歸京。
三月十日、廳内に於いて聯合區會を開き疏水工事計畫の説明をなす。即日議了。十四日より二十六日迄、大阪滋賀水害豫防工事施工場所の實地檢分をなす。此の間堺煉瓦工場を調査す。
四月七日、疏水事務取扱規則出來。十八日、長等山隧道工事日程決定す。
五月十日、長等山隧道中心線伐木。十五日、任京都府三等屬。十八日、試驗掘を藤尾口に着手す。
六月二日、三日、疏水工事起工式を擧ぐ。六日、シヤフト水揚用ポンプを大阪造幣局より買入る。
七月十七日、疏水事務所を藤尾村に建築。
八月二日、シヤフト工事着手。二十一日、山口縣より坑夫頭福田兄弟來る。
九月十九日、藤尾口切取工事着手。
十月七日、シヤフト出水工事困難。
十二月七日、シヤフト大出水。十二日、シヤフト機械完成。二十七日、藤尾切取完成す。

明治十九年　一八八六　二十六歳

二月二日、任京都府一等屬。

三月十七日、石材切出工場を作る。二十一日、藤尾隧道口工事着手。二十五日、内務大臣、京都府知事巡視。二十九日、シャフト坑底よりの隧道工事に着手す。四月二十六日、樺山海軍次官及び佛人ベルタン同行疏水線を見る。二十九日、三條内大臣來る。

五月二十一日、大津開門に着手。

六月二十九日、御陵日岡間の線路確定。

八月七日、京都發。生野銀山にて坑夫に關する打合をなし又福知山宮津間の道路工事を取調ぶ。二十八日、任京都府一等技手、叙判任官一等、給下級俸。

九月二十五日、長等山隧道東口工事に着手す。

十月一日、第二隧道中心線確定。五日、シャフト出水。十一日、隧道煉瓦積工を始む。十三日、安朱川水路橋計畫成る。

十二月十六日、第三日岡隧道線取調。

明治二十年　一八八七　二十七歳

三月十六日、インクライン豫算調査。

四月七日、任京都府四等技師。叙奏任官四等、賜下級俸。二十二日、精算上煉瓦大形壹枚代價七厘、小形四厘にて製作し得ることを確む。

五月四日、電話機設置の事決す。三十日、英人パーマー氏來る。南禪寺水路開設計成る。

七月九日、シャフト工事と長等山隧道(藤尾)西口事と貫通す。

十一月十一日、榎本文部大臣巡視。

明治二十一年　1888　二十八歳

一月元日、第五隧道貫通。十八日京都舞鶴間の鐵道線路調査書を京都知事に呈出す。二十四日、英人メーク氏來る。

三月十八日、著書工師必携第一册原稿成る。

四月十二日、大阪府各豫防工事見分。

六月三日、第三隧道貫通。二十五日、大隈外務大臣大津工場巡視。滋賀縣移廳式。

七月二十五日、伏見出張、これを鴨川運河計畫の發端とす。

九月二日、桂川架橋工事計畫及び豫算完成す。

十月五日、長等山隧道東口崩壞、六十五名坑内に密閉さる。七日、一同無事に出坑す。九日、米國保育水力配置方法取調として米國へ出張を命ぜられる。九日京都發十日、午前二時大津を發足す。午後二時四日市着(當時大津以東は鐵道の聯絡なく二人曳人車にて旅行)午後四時廣島丸に乘込む。十一日、午前十一時横濱着。十五日、東京工學會にて送別會あり。十九日午前八時四十五分新橋發横濱着、乘船手續をなす。此の日僅に暇を得て頭髮を梳るを得たり。米國へ同行する高木文平氏と横濱にて會合す。二十日、午後二時アビシニヤ號(二千八百噸)に乘込む。

Position of Ship at local noon, every day.

Date 1888	North Lat.	Longitude	Distance miles	Remarks
Oct 20				Yokohama.
21	31° 42′	E. 141° 1′	67	Cloudy.
22	37 25	140 17	246	Stormy.
23	39 0	147 49	185	Clear, Highwave.
24	41 34	153 28	301	Misty.
25	43 59	159 28	302	〃
26	46 7	165 49	297	〃
27	48 8	172 40	300	Stormy.
28	49 52	179 40	300	Clear, Highwave.
28	50 1	W. 172 12	314	〃 〃
29	50 10	164 18	305	〃 〃
30	50 2	156 46	294	Rainy.
31	49 53	148 0	304	Fine.
Nor 1	49 45	140 39	316	, Sometimes rain.
2	49 2	132 40	314	〃 〃
3	48 28	125 0	298	Observe land.
4		Arrive Van Couver 3 Am.		

十一月四日、午前三時、バンクーバー着。四日、午後一時加奈太太平鐵道により、バンクーバー發、モントリオルを經て十一日午前九時ニューヨーク着。十四日、ワシントン着、特許局及びポトマック運河を見る。二十一日京都に作るインクラインの例をえに取るため、モリス運河を見る。二十三日、ニューヨークへ歸る。二十七日、ボストン着、電氣及び水道事業を見る。十二月三日、リン市に於いて電氣鐵道を見る。これ京都電氣鐵道の發端なり。四日、ローエル市にてフランシス氏と共に同市の水力を見る。五日、ホリヨークにてハンセル氏に面會す。六日、午前八時半ボストン發ニューヨークへ歸り、同地の電氣事業

を見る。十七日、再びモリス運河のイングラインを見る。二十三日、朝九時ニューヨーク發。二十八日、アスペン着デブロー氏案内にて水力電氣工事を見る(至つて小規模のものなり)。三十一日ネバダ州にて日食皆既を見る。

明治二十二年　1889　二十九歳

一月二日、桑港着。三日、ベルトン會社に於いて水車設計の事に付相談す。五日、午後三時出帆ベルジック號(三千噸)にて歸朝の途に就く。二十三日、横濱着。三十一日、京都へ歸る。

二月十日、水力配置法調査報告書作製に着手。二十七日、第一(長等山)隧道貫通。

三月二日、大津閘門扉設計成る。十日、第一隧道貫通祝賀。

五月一日、西郷海軍大臣巡視。二日、インクライン線にレールヲ敷設す。二十九日、インクライン用水車及び鐵管註文を發す。

六月三日、第三(日岡山)隧道貫通。十七日、中級俸下賜。十八日、京都發。二十二日、内務省各技師と大阪滋賀の豫限工費の件につき論辯連日、二十九日、松方内務大臣、芳川同次官と談し大阪滋賀豫防工事の事決定す。

(參照此の年七月一日東海道鐵道草線初めて全通す)

七月五日、横濱水道水管注水を見る。六日、歸京。

八月二日、ベルトン水車到着。三日、第二第三隧道落成祝賀。二十二日、近畿大洪水あり。大水後桂橋を見分す、果狀なし、好成績。

九月四日、疏水圖譜自費銅版製に着手。七日、京都府下水害地及び京都舞鶴鐵道線見分。十日、歸着。十四日、榎本文部大臣疏水路巡視。内國勸業博覽會へ疏水雛形出品を決す。京都市水設計案成る。

十月一日、京都發鐵道線路選定のため舞鶴及び生野へ出張九日歸京。十四日、南禪寺隧道貫通。

十二月七日、第三隧道内に用意のため水を湛へ置き通舟を試みたるとき誤つて舟より落つ。暗黑にて困難す。

明治二十三年　1890　三十歳

一月十七日、水力利用事業及び鴨川新運河案市會にて可決。（昨年特別市制發布）

二月二十六日、疏水運河用の舟出來す。

三月十四日、朝大津より通水を始む、夜半安朱川に達し十五日、京都へ達す。十六日、大津閘門を閉ぢて漏水を試驗す。十八日、豫防工費として金百五十圓を寄附したるに付木盃壹組下賜。十九日、通船す。

四月九日、通水式の際閘門の開閉を指揮して井天覽に供す。二十九日、琵琶湖疏工事に付專ら擔任し、日夜精勵勤勞不尠候條爲慰勞年俸十二分一を下賜さる。

五月一日、京都發。五日工學會大會に於いて演說、十日、叙正七位。十四日、工事中の横濱築港及び關西鐵道線を見る。十七日歸京

六月十五日、水力變電所用のペルトン水車到着。二十六日、インクライン用舟枠車の通過を試む。二十七日、發電機（百馬力）二臺到着。

八月十二日、本願寺渥美氏來る、同寺の防火の件なり。二十三日、伏見インクライン線巡視。

十一月三日、任工科大學教授（東京帝國大學）、叙奏任官四等上級俸下賜。七日、結婚。十二日、東京着。

十二月二日、京都府より土木事務監督の囑託を受く。

明治二十四年　1891　三十一歳

一月家族引纏のため京都へ行く、母妻同行十一日東京着、西片町十番地へ廿八號の借宅に入る。十六日、工手學校教務主理となる。

四月十三日、陞叙奏任官三等年俸千二百圓下賜。

六月十三日、經濟學協會に於いて鐵道調査委員を作りて全國鐵道鋼を取調ぶ。

七月一日、彌生町三番地へ轉宅。十三日、東京發足。二十一日、名古屋にて開催せし學士會大會にて演說。

八月四日、京都發丹波丹後へ出張。十一日、京都へ歸る。二十四日、工學博士の學位を授けらる。

十月二十八日、旅行の途中尾濃の大震に出會す。三十日、名古屋着。三十一日、震災地調査。

十一月一日、四日市を經て京都着更に震災地にて被害を調査して七日、東京着。十九日、琵琶湖疏水コロタイプ寫眞版入圖譜出來、版權免許。震災地寫眞を作る。

十二月三日、震災調査の件を建議す。六日、錦歸舘其の他各所にて地震に關する演說をなす。震災豫防調査會設立に盡力す。

明治二十五年　1892　三十二歲

一月二日、インクラインにて初荷扱をなす。六日東京に歸る。十一日、長男秀雄生。二十七日、皇城鐵煙突調査。

三月二十三日、震災に關して煉瓦の試驗をなす。

五月二十五日、宮城內豐明殿脇煙突設計圖出來す。本邦に於ける鐵製煙突のレコードなり。二十日、工學會演說「インクライン」に就いて。

七月十四日、震災豫防調査會委員被仰付。二十日、東京發足、京都市會に於いて說明をなす。二十七日、京都市會に於いて鴨川運河斷行に決す。

八月二日、東京に歸る。十六日、鐵道線調査のため京都及び兩丹地方へ出張。二十七日、京鶴鐵道意見書を府知事に出す。(二十一年一月提出したるものに關聯す)。

九月一日、東京に歸る。
十月二十六日、宮城内鐵製煙突内部煉瓦卷共皆完成、好成績なり。
十一月二日、房總電氣鐵道線の調査を爲す、藤岡博士同行。
十二月二十二日、東京出發、伏見運河工事を檢分す。

明治二十六年　一八九三　三十三歳

一月二十二日　石菴先生三十七年忌法事を執行す。
三月三日、箱根水力を調査す。八日、伏見インクライン計畫圖十二枚及び房總電鐵計畫圖出來す。
四月二十四日、京都電氣鐵道調書出來(山川氏共調)
五月十八日、電氣學會にて「水力談」講演。二十六日、工師必携合本出來す。二十八日西片町十番地は十號へ轉宅。
六月十三日、土木會委員(内務省)被仰付。
七月一日、母死去。三日、葬式。七日、除服出仕。
八月二十三日、東京發。鴨川運河を見る。武庫川及び宇治川水電事業を取調ぶ。
九月五日、東京へ歸る。十一日、三級俸下賜。十六日、箱根水力事業の實地を取調。二十九日より、横須賀に於いて大形木材の強弱試驗をなす。
十月十四日、土木會に於いて淀川改修建議をなす。
十二月二十六日、陞叙高官等五等。

明治二十七年　一八九四　三十四歳

一月十一日、英國工師會へ琵琶湖疏水工事の報告書を送る。
二月二日、東京發遠州氣多水力工事を見る。二十四日、西片町九番地へ轉宅す。二十八日、叙從六位。
三月九日、學士會總代として大婚賀表を上る。聖上陛下大婚二十五年祝賀宮中夜會午後九時半より翌日午前二時に至る。大婚二十五年祝典の章を授與さる。二十九日、東京發、京都行。本願寺防火の方法を研究し、本願寺諸氏と協議をなす。疏水及び鴨川運河を檢分して東京へ歸る。
五月十四日、本願寺防火水道仕樣書を桑門氏に渡す、山田忠三氏來る。三十日、門主に水道の說明をなす。
七月十二日　淀川改修調査會終了。二十五日、英國インスチチユーション、オフ、シビル、エンヂニーヤより「テルホルド、メダル」及び「プレミヤム」贈呈の通知あり。
八月十三日、北海道鐵道敷設に關する調査のため東京上野驛發。（栗橋地方にて大出水に遭遇す）函館室蘭を經て十七日、札幌着。二十日、小樽水道の水源地を勝田川に定む。小樽築港及び上川鐵道線其の他排水工事を見て札幌に歸る。二十九日、午後十時室蘭乘船（室蘭丸三十五噸）。三十日、午前九時函館着。大沼疏水事業の計畫を取調ぶ。
九月二日、函館水道工事を見て四日、東京着。二十五日、鴨川新運河通水式あり（不參）。
十月十日、造家學會にて耐震講造法の演說をなす。二十二日、酒田大地震。三十一日、震災調査のため東京出發、酒田地方の震害を取調ぶ。
十一月七日、東京へ歸る。二十二日、內匠頭へ奧羽震災寫眞二十四枚を呈す。此の寫眞は　天覽に供されたり。
十二月十二日、發病。二十日、腸チフスと決し赤十字社入院。

明治二十八年　1895　三十五歳

一月二十一日、退院。二十六日、本願寺鐵管敷設始まる。

二月三日、東片町二十一番地へ轉宅す。六日、京都着、本願寺防火水道工事、疏水及び電氣鐵道工事を見る。十九日、東京に歸る。

三月十五日、京都着。十六日より本願寺水道の注水を始む。十八日、注水終了。二十日、東京へ歸る。

四月五日、本願寺第二工事豫算を本願寺に提出す。十一日、次男主計出生す。

五月十九日、和田守記憶術稽古を始め翌月十六日終了す。

七月十九日、東京發京都に於いて公園噴水、大谷ハイドロリツクラムの据付をなし廣島にて水力の調査をなす。

八月一日、京都にて運河を檢分し。十二日、東京に歸る。

九月十七日、廣島水力電氣會社の創立出來す。

十月十九日、伊香保水力調査。

十二月十八日、東京水力會社事業計畫調査。

明治二十九年　1896　三十六歳

一月、京都鐵道會社より招申込來る、斷る。三十日、叙高等官四等。

三月三日、內務省に於いて淀川改修案審議可決す。

四月十五日、英國海軍大臣スペンサー氏工科大學に來る。二十三日、大學教授會へ北海道鐵道擔任のため同道へ就任の事を相談す。

五月五日、山島氏につき馬術修業を始む。十五日、臨時北海道鐵道敷設事務調査囑託、手當一ヶ月拾五十圓贈與。二十七日煉瓦接合試驗報告を震災豫防調査會へ提出す。二十九日、本俸二級俸下賜。

六月八日、工手學校及び攻玉社の教務を辭す。二十三日、小田原電鐵計畫書を作る。十四日、大阪に於いて宇治川水力の話を爲す、余の計畫に就いて也。外山、高木、土居氏等來會。二十一日、著書工師必携合本及び水力成る。

七月十日、赤坂新阪町八十二番地に邸宅を買求む、家族此處に住む(大正八年實却す)。十八日、東京發北海道へ赴任す。二十二日、札幌着。二十四日、任臨時北海道鐵道敷設部技師、叙高等官四等給二級俸。二十八日、全道鐵道踏査のため發足す。神居古潭、旭川永山泊を經て

八月一日、天幕泊(海拔一三五〇呎)峠(二七五〇呎)湧別、網走、硫黄山(此の間蟲甚だ多し)、標茶を經て七日、釧路着。九日、厚岸にて日食皆既を見る。八田牛を經て十一日、根室着。十四日、釧路に歸る。十五日、釧路にて地方實業者を會して調査をなす。十六日、釧路發。尺別、大津、藻岩泊、十勝川、廣尾、鹿野、浦川、鵡川(水深くして馬腹以上に及ぶ泳渡を要す)勇拂を經て二十四日、札幌に歸る。二十九日第一期線を選定す。

九月九日、第一期線起工順序を定め、建設費を金千八百萬圓と決定し、其の收支豫算を作製す。二十二日、京都(山田忠三氏)より琵琶湖大洪水にて大津の閘門扉上を水二尺越せりと申來る、閘門充分に效ありしを證せり。

十月二十三日、鐵道第一期は十二年繼續となる。

十一月二十日、札幌發。二十五日、拓殖務省にて次官、局長と折衝す。二十六日、高島大臣と會見。

十二月廿三日、鐵道會議に於いて第一期線可決す。二十六日東京發、京都に於いて大谷派本願寺屋根上の防火水管、及び疏水線路を見る。

明治三十年　1897　三十七歳

一月六日、廣島にて山陽鐵道を調査し、八日、東京着。十一日、衆議院に於いて北海道鐵道の説明をなす。此日皇太后崩御に付

一週間議會を休む。十三日、小樽築港の調査をなす(議會説明のため)。二十六日、帝國議會に於いて北海道鐵道の説明をなす。二十九日、主査會に於いて鐵道案決定す。三十一日、委員會通過。

二月十五日より十八日迄帝國議會豫算會。十八日、鐵道案可決。二十六日、貴族院に於いて函館小樽間の鐵道問題を述ぶ。

三月一日、貴族院に於いて鐵道及築港説明同案可決す。三日、工師必携合本出來。十一日、谷干城上奏案否決す。十六日、貴族院に於いて豫算案決定す。十八日、衆議院は貴族院回付案を否決す。十九日、兩院協議會纏り豫算案成立す。二十四日、函樽鐵道案決定(兩院會議最も混雜)。二十五日、東京發。二十八日、家族一同と共に札幌着。

四月三日、南四條西七丁目の宅に移轉す。十四日、任臨時北海道鐵道敷設部長。二十四日、北海道へ轉籍す。二十二日、三十一年度業豫算成る。

六月四日、北四條西四丁目の官宅へ轉宿す(亦坂新坂町へ田邊蓮舟居住す)。八日、空知太にて機關車試運轉好結果引續き各地出張。二十六日、北海道炭鑛鐵道會社室蘭新線の監査をなす(七月一日開業)

八月三日、京都大谷派本願寺噴水防火大試驗を爲し、好結果と申來る。

九月一日、拓殖務省廢止内閣交迭す。四日、北海道長官原保太郎非職、安場保和長官となる。

十一月五日、任北海道廳技師叙高等官四等二級俸下賜。十三日、安場長官より話ありて函樽鐵道線調査に從事す。

十二月二日、鐵道技術長を命ぜらる。十四日より、函館小樽間線路踏査。十六日、一級俸下賜。二十八日内閣總辭職。

明治三十一年　1898　三十八歳

一月二日、小樽に於て函樽線調査。四日、小樽港調査委員を命ぜらる。十日、桃内小樽間に於て大風雪に會す引續き函樽線調査。

二月一日、留萌雨龍線調査。十六日、三十二年度豫算取調。二十日、三男多門誕生。二十七日、稻穗隧道線調査。

三月三日、政府事業大收縮のために事業中止の儀井上大藏大臣より通知に接す。四日、札幌發。六日、東京着。七日、安場長官を訪ふ。九日、芳川內務大臣を訪ふ。直ちに內務大臣同行井上大藏大臣を訪ふ、論辯して終に大臣の同意を得內務省に歸つて諸事取調をなす。十一、十二日、大藏省にて協議。十八日、繼續費百萬圓無事通過と決定。二十七日、東淸鐵道副社長ケルベツ氏と鐵道局にて面會す。

四月二十一日、諸川大出水空知川落橋。

五月四日、鐵道年度割短縮調査。

六月八日、札幌發。旭川工場、天鹽線を巡視して十四日、エキスケベター試運轉をなして歸札。二十六日、上川線軌條最後のスパイクを打ち、同日歸札す。二十八日、叙勳六等授瑞寶章。政黨內閣成立大隈重信總理大臣となる。

七月一日、安場長官辭職引續書を作る。杉田氏長官となる。十四日、空知川鐵橋二百呎桁試驗をなす、皆好成績。十五日、瀧川旭川間試運轉好成績。十六日、瀧川旭川間開業す(收入一日金三百圓)。

八月二十一日、官設鐵道開業式、午前五時札幌發正午旭川着開通の式を擧ぐ。二十三日、協賛會にて園遊會及び祝賀會あり、協賛會長對馬嘉三郎、工藤行幹等の演說につき松永參謀長其の他の軍人怒つて歸る。二十六日、陞叙高等官三等。

九月六日、杉田長官外數名と天鹽線を巡視す。前日より大雨來る。七日午前十一時旭川發午後一時伊納着、大出水に會しカモイを步行し、水中をトロにて走り辛うじて深川着。深川にも洪水襲來す。此の夜危險なり、夜明舟を出し救助をなす。十日、大西及び工科實習生谷、今津と同行しカモイコタンを見る。深川に歸つて泊す。今津は第二石狩川にて此の日溺死す。十三日、札幌に歸る。直ちに東京へ行き水害善後處分に取掛る。三十日、工學會にて演說す。

十月十日、叙從五位。二十二日、北海道治水調査會員を命ぜらる。

十一月一日、任北海道廳鐵道部長、叙高等官三等。一級俸下賜。七日、北海道廳東門前の官舍へ轉宿す。二十一日、水害復舊全部出來。

明治三十二年　1899　三十九歳

一月十五日、工學會記載北海道鐵道の原稿成る。二十二日京都疏水を賛賞したるLord Charles Beresfordよりの手翰へ返事を出す。三十一日、鐵道車輌自動聯結器到着。

二月十八日、空關港調査委員を命ぜらる。

三月三十一日、インヂニーリングニュースへ北海道鐵道記事を送る。

四月十七日、札幌發。東京及び九州各地を經て。二十二日、廣島着、呉に電燈五百餘あり、廣島へ送電す、(日本最初の長距離送電一萬ボルトの記錄なり)。二十三日、京都に於いて中澤學長より京都帝國大學に轉職されたしと話あり。二十六日、東京着。

六月八日、東京發。十一日、歸札。

八月二十六日、旭川美瑛間開業免許來る。釧路方面より起工の調査をなす。三十日、旭川に於いて桂陸軍大臣を迎ふ。

十一月十一日、京都疏水二百個增水の話あり。

十二月十六日、函檜鐵道關係明細書認む。

明治三十三年　1900　四十歳

一月一日、東京着。十日園田長官を訪うて、辭意を話す。十一日、京都帝國大學中澤學長へ近く歐米へ旅行するにつき十月には歸るべし、其の後就任したしと申送る。十五日、奥田次官に京都帝國大學行は洋行より歸つての後にしたしと話す。二十二

日、福島大佐荻野少佐を參謀本部に訪ふ(西伯利行の用件)。三十日、山縣總理大臣と話す。

二月六日、文官分限令第十一條第一項四號により休職を命ぜらる。七日、事務引繼のため參廳を命ぜらる。十六日、在職中職務勉勵に付賞として金五百圓下賜。鐵道部員へ告別。十九日、官民送別會。二十日、上川出張、旭川にての送別會は開業式の時よりも盛なりし(旭川工場に於いて何か記念物を欲しと云ふに付帽子を置いて歸る。立派なる箱に納めて同處に保存さる)。二十一日歸札。二十二日、事務引繼終了。二十三日、家族引纏め札幌發、二十六日東京に歸る。赤阪區新阪町に田邊及三宅兩家居住につき他に假住す。

三月二日、中澤氏より京都帝國大學は來學年の始め(九月)より賴みたしとの話あり。十五日、外國旅行の儀認可の通知に接す。十六日、參謀本部行。十九日、赤阪新阪町へ本籍を移す。二十二日、參謀本部に大澤氏及び福島大佐を訪ひ露國行の打合をなす。二十三日退官したる方外國に對しても都合宜しと話あり。二十七日、讀賣新聞に祕密調査を田邊に依賴さる云々の記事出づ。露國に對して都合惡しき故に其の記事の取消を出す。二十八日、依願免本官。

四月三日、曩に計畫したる小田原電鐵線路完成したるにつき其の開業式に招かる。六日、參謀次長を訪ふ。五日、滿十四年在官に付金千四百五十八圓三十錢三厘下賜。七日、上原參謀部長來宅(十三日、機密費中より金一封落手す)。八日、京都行。九日、主殿頭等と御所防火用水の事協議。十二日、東京に歸る。十五日、露國公使 Baron Rosen を訪ふ。十九日、參謀本部長次長を訪ふ。二十日、桂陸軍大臣を訪ふ。二十三日、旅行免狀護照其他手續終了。二十八日、東京發。三十日、京都着。

五月五日、神戸着。六日、神戸發乘船(山陽線暴風のため列車不通)。七日、德山着(灣高く出帆出來ず)。八日、德山發門司着。九日、長崎着。十二日、大連丸に乘込む。波荒く此の日出帆せず。十三日、午後三時出帆。長崎釜山間波高し。十四日、午前六時釜山着。午後五時發、十五日午後七時元山着。十六日、未明元山發。十七日、午前九時浦鹽着。十九日、午前四時浦鹽

發。二十日、午後一時ハバロプスク着。二十二日、河舟に乘る。黑龍江を遡る。二十九日、午前九時プラゴベスチンク着。

六月三日、午後八時プラゴベ發乘船。十六日、午前九時ストレテンスク着。十八日、午前四時ストレテンスク驛發、建築列車便乘。二十一日、午前八時、ミソワヤ着十時乘船す。此の日ボーワ人の東行するものより北支那に騷動ありし由を聞く。午後三時バイカル着。二十二日、西行急行列車に乘る。二十三日、アムルスキ出兵を戰地に送る露帝の勅令出でたりと聞く。二十八日、四男亮吉生る。三十日、午後四時モスコー着。

七月二日、午前九時ペトログラード着。三日、ケルベツ氏を訪ふ。九日、閑院宮殿下へ西伯利鐵道の模樣御報告。十日、ペトログラード發。十二日、ベリン公使館を訪ふ。奬謀本部宛書面を片山宅へ出す。十三日、ブランケンベルヒ下水耕地視察。二十日巴里にて萬國博覽會見物。バーセール宮及び下水工事を見る。二十七日、リオン近傍にて水力工事を見る。二十八日、ゼネバ水力視察。二十九日、サンプロン隧道視察。三十日、セルマツト鐵道視察。三十一日、ロージヤン、ケーブルカーを見る。夜半パリに歸る。

八月三日、パリ發ロンドン行、六日、セントポール寺院を見る。英靈塔の參考となす。十日、メルトン下水を見る。十二日、ロンドン發グラスゴー行。十三日マキントツシ氏と會しダイヤー先生を訪ふ。明治工業史編纂の事を話す。十四日、グラスゴー下水を見る。十五日、フオース橋及び其の近傍を見る。十六日、グラスゴー發リバプール着。十七日、マンチエスター運河を見る。十八日、アンプリヤ號乘船。十九日出發。二十五日、ニユーヨーク着。三十一日、ナイガラ水力工場及び瀑布を見る。

九月一日、バハローにて自働聯結器を見る。二日ナイヤガラ發。六日、バンクーバ着。十日、加奈太太平鐵道視察。十一日、出發、歸朝の途に就く。二十四日、横濱着。

十月一日、任京都帝國大學理工科大學教授、叙高等官三等、本俸二級俸下賜。二日、赴任。六日、葉山に於いて桂大臣に西伯利談をなす。十日、參謀本部大澤中佐に西伯利談をなす。十五日、家族一同京都へ向け發足。十六日、山縣總理大臣へ西伯利鐵道話をなす。十九日、參謀本部に於いて大山總長閑院宮次長、及び上原、伊知地、大澤等二十四名に西伯利鐵道取調の報告をなす。二十日工學會にて西伯利談をなす。

十一月十一日、參謀本部へ第一回報告送る。Prof. L. P. Brackenridge, University of Illinois へ送書す、日本にて作るべき鐵道研究車に就いての相談なり。二十四日、學藝會に西伯利鐵道を話す。

十二月四日、煙突振動試驗。九日、十日、保津川橋及び二條驛附近軌條の振動を試驗す。十日 淨土寺眞如町に家屋を買入河原町より轉住す。十五日、參謀本部へ第二回の報告調査。二十七日、參謀本部第三回(最終)報告出す。

明治三十四年　1901　四十一歳

一月十一日、大磯滄浪閣に伊藤樞密院議長を訪ふ。明治工業史編纂につきてなり。十五日、國民同盟會にて「シベリヤ鐵道談」。十九日、經濟學會にて「西伯利鐵道の話」。二十三日、三條蹴上に殉職者の碑を建つるに付書面を京都府廳へ出す。

二月八日、田中宮内大臣來京す、京都御所火防用水一件なり。二十三日、大學水道白川水源地を見る。

三月二十六日、下京粟田口字山下疏水インクライン上脇へ建碑の願許可さる。

五月十二日、鐵道協會總會を大阪に開きて「西伯利鐵道の演說をなす」。十六日、以後二十一日迄關西線にて軌條試驗。

七月一日、木材試驗。十九日、陞叙高等官二等。

八月一日、京都市土木顧問を囑託す。二十日、新淀川架橋落成其の撓度振動試驗をなす。二十三日、關西線木津川橋試驗。

九月十二日、内國製產品共進會審查總長囑託。十四日、中澤學長不在に付學長事務代理。十七日、ヘンリー、ダイヤー先生へ明

治工業史の件に付伊藤議長（博文）と打合せたる事を申送る。

十月十八日、五二會臨時品評會審査員囑託。十九日、北海道鐵道會社より報酬金來る。三十日、叙正五位。

十一月二十二日、堤内匠頭と共に京都御所内を檢分す。三十日、疏水全線水準實測に着手す。

十二月四日、公債證書額面壹千百圓を大學に寄附し創立壹百年期迄利殖して之を適當に使用することゝして寄贈願を出す。又凡そ金壹千圓の豫算にて鐵道研究車製作の目論見をなす。右は既記北海道鐵道會社よりの報酬金を以つて之れに充つ。

明治三十五年　1902　四十二歳

一月六日より十二日迄關西鐵道軌條橋梁振動試驗（日比氏同行）。十七日、京都の疏水は第二疏水として別に一條の新水路を作るを好とする意見を開陳す。二十四日著書西伯利鐵道出來に付閑院宮殿下に獻本す。

三月五日、水量五百五十個を引用する第二琵琶湖疏水工事の調査出來す。十六日、渡邊内匠頭に御所引水計畫豫算を提出す。二十四日、市參事會に於いて第二疏水事業説明をなす。二十六日參事會滿場一致にて可決。

四月八日、大學にて木材伸張試驗を始む。九日、米國鐵道協會正員となる。

五月十八日、疏水工事中に死したる碗職者のための建碑蹴上に出來たるにつき其の祭典をなす、來會者七十余名。二十二日、東京行。二十七日、土木局にて疏水新水路の説明をなし、御所御用水に付宮内省にて田中大臣、内藏頭、内匠頭主殿頭と協議す。三十一日、京都歸着。

七月二十七日より御所御用水豫算取調。

八月十三日、叡山ケーブルカー調査。

十月二日、自費にて新造するタイナモメーター、カー車體の註文をなす。三日より煙突及び軌條試驗。九日、帝國參謀部員アダ

バシ氏來京面會したしと申來る。十日、ホテルに氏を訪ふ。十九日、第二疏水取調書出來に付其の設計者として捺印す。
十一月九日、北垣前京都府知事銅像除幕式。
十二月十六日、東京行、作業局にてタイナモメーター、カーを七條驛に置き呉れと依頼す。內務省にて第二疏水の事を協議。十七日、京都御所消火栓設計取調囑託。二十六日、歸京。二十七日、叙勲五等授瑞寶章。

明治三十六年　1903　四十三歳

一月十一日長女をし子生る。二十五日、大阪汽車會社へ註文のタイナモメーター、カー出來に付堀氏同行見分す。
二月十七日、第五回內國勸業博覽會審査官被仰付。二十五日紀の川橋梁試驗準備のため出張。十六日、實施。
三月二十七日、賜本俸一級俸。
五月一日、天皇陛下、二日、皇后陛下大阪博覽會通運館行幸啓に付御說明申上ぐ、八日、皇后陛下大學行啓に付模型を一室に集め御說明申上ぐ。九日、江良氏より箏曲を習始む。二十三日、京都協賛品評會審査長を囑託さる。三十一日、皇太子並に妃殿下博覽會御覽に付說明のために大阪行。
九月七日、米國セントルイス博覽會出品物は圖面と寫眞とにすることに決す。十三日、疏水に設けたる自動水位器好成績。
十一月十一日、研究車（ダイナモメーター、カー、）プレーキトレーン、パイプ取付け。十四日、セントルイス出品物の說明書を認む。二十日、田邊高木兩氏寫眞を水私事務所に掲くることに市參事會にて決したる旨話あり。
十二月十四日、第五回內國勸業博覽會賞として銀盃壹箇下賜。

明治三十七年　1904　四十四歳

一月二十四日、京都大津間タイナモメーターカー試驗運轉（日本に於いて最初のもの）

三月二十三日、法科大講堂にてシベリヤ鐵道の講演をなす。二十九日、聖留易博覽會出品物に付盡力したる禮として市長より屏風一双を贈らる。

四月十一日、長男秀雄京都府立第一中學校入學。

五月五日、京都大津間の試驗車運轉をなし八日にて終了。

六月二十八日、叙勳四等授瑞寶章。

七月十六日より二十二日迄沼津山北間試驗列車運轉實驗をなす。

八月七日、米國出品疏水圖をワシントン大學に寄附することを申送る。

十月四日、オリエンチス氏に就き佛語稽古始む。二十三日、セントルイス博覽會より銀牌を贈り來る。

十二月十五日、ダイヤー先生より大日本の著書を贈らる。To prof. Tanabe Sakuro, a distinguished graduate of the Kobu-Dai-Gakko, who has done good service to Dai Nippon. As a mark of friendship and esteem. Henry Dyer. を記してある。

明治三十八年　1905　四十五歳

一月十七日、去年米國にて入手したるペルリ來朝の時の繪を京都府圖書館に寄贈す。二十日より二十五日迄沼津山北間及び東海道鐵道線研究車運轉。

五月二日、廣島地震に付七日より十三日迄實地につき取調をなす。

七月四日、京都市參事會に於いて琵琶湖疏水線隧道入口に英文にて、Sakuro Tanabe, Dr. Eng., Engineer-in-chief, Works Commenced August 1885, Completed April 1890. を刻するに決す。十七日より二十一日迄京都、奈良、大阪、名古屋間鐵道研究車運轉す、實驗。

九月二十六日、軌條振動報告完成(震、災豫防調査會用)十二月五日提出。

十月三日、御用有之清國へ被差遣。四日、米國工師會員となりたる通知あり。八日、宇品發。十一日、大連着。十三日、旅順着

二十五日、奉天發。二十六日、姚干戶屯泊、騎馬。

十一月三日、仁川にて天長節祝會あり。九日、京都に歸る。十九日、滿州鐵道軌間問題を山縣總理大臣に話す。二十一日、ハリマン軌間問題に付鐵道時報へ寄稿す。

十二月九日、鐵道茶話會に於て「滿韓鐵道の話」。十日、輕便鐵道軌間統一意見書を提出す。

明治三十九年　1906　四十六歳

一月六日より十四日迄東京行、疏水事業許可に關する打合せ、鐵道局打合せ等のためなり。大磯に山縣總理大臣を訪ふ。

二月十四日、新案撓度振動記錄器島津にて製作のもの出來す、好成績。二十三日、震災豫防調査會へ京都二條鐵道振動報告を送る。

四月四日、第二疏水工事許可の命令書下付あり。七日、東京水力電氣會社より禮狀及び銀像を贈り來る。十七日より二十五日迄

京都名古屋間及び北陸線研究車運轉研究。二十六日より京都上水工事の取調をなす。

六月十三日、急速濾過法取調。十四日鴨綠江木材強弱試驗をなす。

七月二十五日、京都發岡山市よりの依頼により同縣吉井川及び旭川水力調査をなす。三十一日松江着。

八月四日、歸京。

九月一日、名古屋行、木曾川水力電氣調査のためなり。五日、歸京。六日、松江市嫁島華表建設に關する詩を同市長へ送る。

十月三十一日、本栖湖水力電氣調書を作る。

十一月八日より十六日迄京都市參事會にて第二疏水及び上水案說明。十六日、上水、十七日疏水案可決す。二十一日、市參事會

（道路擴築案提出（十二月十二日、再提出）。

十二月十五日、市參事會に於いて道路擴築案可決。

明治四十年　1907　四十七歳

一月三日、京都發。六日、宮内省及び鐵道院行。七日、午後三時芝紅葉館に於いて石菴先生五十年祭執行。八日、内務省土本局にて京都三大事業の説明を爲す。三十一日京都大學紀要に Dynamometer Car Experiments 第一回報告を提出す。ミュンヘン博物館へ寄贈すべき京都疏水鳥瞰圖獨文記事記入の事をシルレル氏に相談す。

二月十二日、筆「銘千鳥」を買得す。

三月六日、ラッド博士夫妻來宅雛祭を見る。京都市會道路改正電鐵市營案可決す。二十五日、鐵道研究車輌鐵道院實上となりたるに付打合。三十日、銀杯壹箇下賜。

四月二日、京都帝國大學十五年紀念のため午後一時法科大講堂にて演説、「水力」。八日、和歌山縣紀の川水力を見る。十一日、歸京。十二日、獨逸國ミュンヘン市博物館へ寄贈する Vogel perspektive 出來に付獨文を記入す。

六月十四日、鐵道調査所より取調囑託を受く。十九日、神戸市街電氣鐵道會社より顧問を囑託さる。

七月十日、列車抵抗力に關する調査を囑託す。

八月二十九日、京都發北海道行。

九月七日釧路着。八日、北海道鐵道全通式參列。十二日、小樽歡迎會。十六日、東京着。

十月二十一日、鐵道研究車報告を鐵道廳總裁に提出す。

十一月一日、白川村村長の寄附せる眞如堂の石籠燈出來に付檢分す（十二月六日完成）。

明治四十一年　一九〇八　四十八歳

二月二十四日、金五百圓寄附の事を大學へ申出（是は四十二年度に臨時雇一名を置き研究に從事せしめんとするため。）二十六日許可さる。

三月四日、第二疏水工事の認可あり。二十五日より三十日まで京都、岡山、廣島、下關間に鐵道研究車運轉。

五月三十一日、賜本俸二級俸。

六月二十日、叙從四位。

七月二十五日、岡田總長問題に付教官四十餘名大學に會合す。二十八日、京都發。二十九日、千賀、中西、教授と共に總長問題に付小松原文部大臣に話に行く。三十一日、山縣樞密院議長を訪ふ又桂總理大臣を訪ふ。

八月一日、村岡、千賀、中西、三教授と共に再び文部大臣に面會す（總長問題）。四日、歸京。十二日、京都市土木顧問囑託。京都市長より第二水利事業設計完成に付感謝狀來る。

十月十四日、大津三保神社に於いて京都三大事業起工式。十五日、京都平安神宮に於いて同式。十八日、京都發西京丸に乘る。臺灣鐵道開通式參列のため出張す。二十四日、臺中にて全通式。

十二月二十五日、箏曲奥入式（江良氏邸にて）。叙勳三等授瑞寶章。

明治四十二年　一九〇九　四十九歳

一月三日、京都帝國大學水電に關して高野川水量調査。十五日、和歌山縣橋梁計畫調査をなす。

二月二日、工業大辭書出版につき盡力す。二十四日、京都經濟會にて「京都上水の話」をなす。

三月十六日より十八日迄長良川新橋（鐵道）試驗、振動記錄トストレッス、メーターを使用す。三十日、田邊蓮舟後嗣を主計とす

る事の話あり。三十一日、秀雄京都府立第一中學校優等卒業。

四月一日、德川前將軍(慶喜)題字明治工業史絹本揮毫到着。五日、南海水電事業及び有田築港和歌山鐵橋計畫檢分のために和歌山縣行。十日、第二疏水小關トンネル導坑着手。十二日、鐵道院より列車抵抗に關する調査並橋梁車輛の振動及び橋梁撓度に關する詞査を囑託さる。十六日、京阪電鐵鴨川線調査。十九日ダイヤー氏(ヘンリー、ダイヤー先生の息)疏水見物。二十五日、長等川鐵道橋梁試驗。

五月十三日、鐵道院に提出する橋梁試驗報告出來。二十二日、鐵道研究列車運轉のため北陸行。金澤開催鐵道協會に出席。高岡富山及七尾港見分。二十七日、歸宅。三十一日(二月十六日附)京都市水道設計の認可內務大臣より來る。

六月十六日、東海道線橋梁實驗報告、日本最初のもの也)鐵道院へ送致す。二十三日山本春擧、高瀨春曉兩氏につき繪の稽古始む。

八月二十七日、近江地震調査のために出張。

九月八日、秀雄高等學校入學。十七日、震災調査會へ近江地震の報告を出す。

十二月二十二日、東京行。二十四日より二十七日迄沼津不二間にて鐵道試驗をなすRetardation test, Draw bar test 兩樣を施行す。

明治四十三年　1910　五十歲

一月、昨年施行せし鐵道試驗の調査書を作る。十六日より十九日迄沼津不二間にて鐵道試驗。二十四日、御所水道に付內匠寮御用掛被仰付。

三月三日、獻金に關し明治四十年三月付にて銀杯壹箇下賜せらる。四日、京都市へ顧問辭退をなす。

六月三日、京都市土木顧問解囑。同日同市事業に關する名譽顧問に推薦さる。十六日、京都御所水道敷設工事着手せし旨上申。

七月十日、京都市中各所の寫眞を取る（是は改正前後對象のためなり）。
八月九日、鐵道院へ鐵道試驗報告書を提出す。
十月四日、機械學會へ列車抵抗試驗報告を送る。十九日、岡山水電調書出來。二十三日、陞叙高等官一等。
十一月二十三日、京津間最後の壁たる第二疏水工事中の安祥寺隧道貫通。
十二月十日、午後一時大津三保崎に於いて隧道貫通祝をなす。三十日、京都御苑内鐵管敷設着手。

明治四十四年　1911　五十一歳

三月八日、民草原稿を坪内博士へ送る。
四月七日、献金につき銀杯壹箇下賜。
八月三日、先考勿堂先生五十年忌を淺草本願寺にて執行。八日より十七日迄大學課外講義として水力を講ず。
十月三十日、彦島線及び海峽隧道線檢分踏測をなす（これ海底隧道を可能なりとする調査の初めなり）。
十一月一日、大分線開業式に參列。三日、小瀨戸線路海峽隧道位置踏査をなす。四日、京都歸着。
十二月二十八日、關門隧道鐵道線取調書を東京鐵道院總裁へ出す（彦島を通過するもの長さ凡そ七哩内海底一哩）。

明治四十五年　1912　五十二歳

一月十七日、民草三味線手付出來。
二月八日、御所水道通水準備。十一日、御所内通水午前十時より午後四時に至り終了、好成績。
三月二十三日、勸業館に於いて明治十六年以來勤務三十年祝として招客。民草披露。
四月一日、貯水池の水を御所水道本管に入れ午後二時紫辰殿前の二消火栓より噴水せしむ成績良好。十三日、第二疏水の通水準

備をなす。十五日、第二疏水通水す、好結果、午後一時より午後六時に至り終了(五月一日より永久に通水するに決す)。

五月十二日、午前十時宮内省諸員京都御所内に參集消火栓を檢分す。十四日、各宮殿下御所内消火栓御覽、大宮御所に於いて宮内省各關係者京都府知事市長等に賜餐。十五日、民草を皇后陛下の御聞に達する由御沙汰に付淨書して河村次官に差出す。二十日御所水道竣功により御紋章付大銀鉢壹個及金一封拜領。二十六日、芝紅葉館に田邊太一の金婚式を擧ぐ。三十一日、山陰線松江開通に付其の式に參列す。此の時初めて寄贈の嫁ヶ島の華表を見る。

六月三日、歸京。十五日、京都三大事業竣功式。十八日、大野助役來宅京都市三事業竣功に付功勞に酬ゆるため感謝狀、金杯壹組及び金貳千五百圓を持來らる。

七月六日、京都市より大學へ寄附せしペルトン水車は余の計畫せるものにて石川島造船所製品なり此の日大學へ到着。十八日改良田邊式撓度振動記錄機島津店より持來る。本機は其の後に二重橋の試驗に用ゆ。十九日、秀雄東京工科大學(建築學科)へ入學。二十八日、陛下御不例との事に付旅行見合せ居りしが御快方との事に付、此の日出發和歌山へ行く。午後八時御危篤の報を得て大阪へ引返す。二十九日、天機伺の爲東上。三十日、列車中に於いて　聖上陛下崩御の號外を見る。正午宮内省へ出頭す。年號大正と改元。

大正元年　1912　五十二歳

七月三十一日、午前九時朝見式拜謁。

八月六日、京都歸着。十四日、東京行。宮城二重橋鐵橋補修工事決定。二十五日より二十七日迄二重橋補工出來に付撓度重力を試驗す。秀雄も助力す、好結果。

九月十二日、午前十時殯殿參拜。十三日、午後五時參内午後八時靈轜宮城御出門。十四日、午前二時四十五分第二供奉列車に乘

込み午後六時半桃山着。十五日、午前八時御陵前祭事。午前十時三分桃山發正午歸宅。

十一月十二日、工業大辭書へ「ランキン傳」を送る。十五日、京都馬場間鐵道試驗車運轉す。十六日、Engineering News Oct. 17, 1912. 京都事業記事及び餘の寫眞を載せたるものを三部送來る。

十二月三日、主計田邊太一嗣子として緣組を屆出。十四日、大阪鐵道茶話會に於いて「水府隧道及び下關九州聯絡線」の話をなす。十五日、鐵道時報新年號へ水底隧道記事を送る。十八日、京都市より寄附の水車を大學構内に据付く。二十四日、下關に行き内務省土木出張所に於いて地質調査ボーリング結果を取調ぶ。二十八日、歸京。

大正二年　1913　五十三歳

二月一日、著書水力製本出來す。山本寛山氏につき習字を始む。

四月四日、米國へ持參する幻燈板を作る。十五日、歐米各國出張被仰付。二十二日、京都帝國大學より英國倫敦に於いて萬國道路會議開催に付本學代表者として參列を命ぜらる。二十八日午後二時四七分京都驛發。二十九日、下關着。八幡にて製鐵所、福岡にて工科大學等を見、下關海峽を取調ぶ。

五月一日、下關發。二日、釜山着。三日、奉天着。八日、長春着。十六日、モスコー着。十八日、午後十一時半巴里着、二十日巴里發、ロンドン着。二十八日、ピヤツシ會社にてホツチング氏と下關海峽水底トンネルの話をなす。三十一日、グラスゴー着。

六月一日、ダイヤー先生を訪ふ。四日、フオース橋梁を見て石齋の一石を得。六日墓地及び水道を見る。八日、ロンドンに歸る。十日、英靈塔參考のためセントポール寺院ウエストミニスター、アベー等を見る。十八日ピヤフン會社にて副社長のモアート氏と下關水底トンネルの事を談合す。十九日、バーミングハム大學行。廿三日萬國道路會議參列（三十九ケ國代表者凡二百名）。翌日市長招待晩餐會。二十八日、會議終了。三十日シエツヒールド、ストラトホルド、オンアポン等に行く。

七月四日、ロンドン中央鐵道(チューブ)オゾーン通風を見る。六日より英國議會傍聽。十日午前三時丹後丸に乘船ロンドンドック發テームス河を下り十一日アントワープ着ブルシセル泊。十三日ケンド博覽會、十四日ウオートルロー古戰場を見る。アムステルダムを經て十八日ハンブルヒ着。十九日エルブ水底トンネルを見る。ストツホルム、トロルハツテレ水力場を經て二十八日ベルリン着。

八月二日、ライプチヒを經てミユレヘン着。三日博物館に行き先年寄附せし京都の疏水鳥瞰圖の掛物を見る。四日館長オスカンホン、ミルレル博士電話にて面會したしと申來るにつき訪問す。世界の有名な人の寫眞を集めて居るから一枚呉れと申込まる。(米國ヨシヂニーリングニユースに揭げてあるものと同一のもの持合せがあつたから贈る)。六日ニユーンベルヒ鐵道博物館を見る此日は此度の旅行の中央日に當る。チユーリツヒを經て九日ルセルン着。十一日、叙正四位。十八日迄滯在す。好天氣の日は登山鐵道を見に行き其の他は宿にて米國イソノヰ大學講演用の草稿を書す。十九日サンゴター隧道通風を見てミラン着。二十日アダメロ水力電氣を見。二十一日ミラン寺院にて石齋の一石を得。二十二日サツプロレ、レツチベルヒとなるを經てインターラーケレ着。ユンゲフロー夕照を見る。二十四日レセルンに歸る。アルプス登山用具を買入れ近山に登山。二十八日パリ着。二十九日サボーレー氏と二次振動記錄の事に付會話す。三十一日ドバー海峽を渡りロンドン着。

九月十日リバープールにて乘船(ビクトリヤン號壹萬二千噸)

Sept. 11 noon	(Wavy)	55°	46′	N	9°	12′	W	274 n.m.	from	Liverpool			
〃 12	〃	(Rough)	56	30	〃	18	57	〃	604	〃	〃		
〃 13	〃	(〃)	56	35	〃	29	42	〃	958	〃	〃		
〃 14	〃	(〃)	55	9	〃	41	37	〃	1368	〃	〃		

ゝ 15 ゝ (ゝ) 52 43 ゝ 52 6 ゝ 1764 ゝ ゝ (流氷山多し)

ゝ 16 ゝ (Fine) 43 4 ゝ 61 30 ゝ 2180 ゝ ゝ

Strait of Belle Isle 2650 ゝ ゝ

十七日、キユベツク着。十八日、キユベツク橋を見る。二十三日、ニユーヨーク着。二十四日、ハーセル氏を訪ふ。廿五日、ハドソン河底トンネルを見る。二十六日、オーラフ、ホツフ氏より招かれハーレム河底の沈埋式トンネル施工を見る。二十九日、リレデンタール氏より招かれヘルゲート橋を見る。ハーセル氏招待會。

十月四日、ヒラデルヒヤにて北海道鐵道のクローホルド氏を訪ふ。九日、テトロイツト水底トンネルを見る。十日イリノヰ大學着、大學學賓となる。十五日同大學に於いて下の題にて講演す。過去及び現在の京都市、日本の工業及び其の教育。(聽講者五百餘名。十七日シカゴ發二十一日シヤトルにて京都より送り越した小形の箏を受取る。二十四日桑港着。翌日トンネル計畫を見る。二十七日スタンホルド大學行。三十日桑港發春陽丸乘船。

十一月五日、ホノルル着十六日横濱歸着。

Oct. 31 noon 35° 52′ N 128° 43′ W 324n.m. from San Francisco

Nov. 1 ゝ 33 7 ゝ 135 35 ゝ 377 distance for one day

ゝ 2 ゝ 30 22 ゝ 142 1 ゝ 375

ゝ 3 ゝ 27 16 ゝ 147 37 ゝ 345

ゝ 4 ゝ 23 57 ゝ 153 28 ゝ 270

ゝ 5 9.15Am 5.0pm ..... 297 Honolulu 2093 from S. F.

〃　6　Noon　22　2　〃　162　56　〃　290

〃　7　〃　23　26　〃　169　32　〃　375　high wave

〃　8　〃　24　28　〃　176　15　〃　373

〃　9　〃　25　46　〃　177　14　〃　362
Nov. 10. omit.

〃　11　〃　27　34　〃　170　27　〃　375

〃　12　〃　28　130　〃　163　52　〃　357　Wavy. Rain.

〃　13　〃　29　39　〃　156　51　〃　374

〃　14　〃　31　13　〃　149　47　〃　381

〃　15　〃　33　52　〃　142　50　〃　386

〃　16 …… 3474 from Honolulu.

二十四日、京都着。二十五日、京都經濟會にて演說。

十二月二十日、萬國道路會議報告を大學へ提出す。

大正三年　1914　五十四歲

二月九日より大學に於いて特別講演。題目パナマ運河。陸上並に水底のトンネル。日甲幻燈を初めて使用す)。

四月九日、ミス、マリー、ダイヤー(ダイヤー先生令孃)京都着。二十九日、澤柳總長辭職に付送別會。

五月二十五日夜より二十六日午前九時まで照憲皇太后桃山御陵御埋葬式に參列す。二十九日、東京行途中、木二芝川にて水電調査をなす。三十一日、鐵道協會に於いて水底トンネルの演說をなす。

七月六日、任京都帝國大學工科大學教授、叙高等官一等、賜本俸二級俸（理工科大學分離の結果なり）。十三日、大學卒業式に於て田邊式搖度振動記錄器を（伏見宮の）臺覽に供し其說明をなす。十四日秀雄順天堂へ入院。二十日、內匠寮御用掛破免。二十四日東京着、二十五日、御紋章附手箱拜領。

八月十三日、秀雄死去す。十六日、秀雄葬式。十七日、墓參。

十月十三日、東京大學へ秀雄奬學金及び知友より寄贈されたる秀雄半身像寄附の事願出づ。十四日、許可。十五日より十九日迄新潟上水會議に行く。

十一月二十三日、涙一痕を太陽へ寄稿す（大正四年二月號に記載）。三十日 銅鉈校へ機關車小形運轉標本を秀雄記念として寄附。

十二月八日、アルプス景色繪圖及びアルペンストックを大學へ寄附す（學生集會所に掲ぐるもの）。十二日、下關着土木出張所にて海峽工事を取調べ、十九日、歸京。

大正四年　1915　五十五歳

一月九日、東京參謀本部に於いて關門地方高の低圖を借入す。水底隧道の件を打合す。

三月三十一日、海軍省に行き下關海峽將來の深淺に付相談す。

四月二十一日、賜本俸一級俸。

五月二十五日、內匠寮技師山本直三郎來宅東京宮城內の防火水道一條に付相談あり。二十九日、海底隧道調査報告を鐵道院へ提出す。

九月八日、多聞第三高等學校入學。

九月十六日、田邊太一從三位に敍せらる。此の日逝去す。

十一月七日、今上陛下京都御着。十日、卽位大典御擧行其の式に參列す。

十二月二十一日、事務格別勉勵の賞として金五百圓鐵道院より給與さる(是は海底トンネル調査に關してなり)。

大正五年　1916　五十六歳

一月九日岱父(北垣國道)逝去。

二月二十日より二十九日迄不快(熱高し流行感冒なり)。二十八日、叙勳二等授與瑞寶章。

四月八日、補京都帝國大學工科大學長。靜子に大典記念章下賜あり。

五月十二日、東京帝國學士院に於いて列車抵抗の演說をなす。

六月十五日、大學敎官遣外問題につき斡旋す、解決。十七日、和歌山水力トンネル額面「利百世」を認めて送る。

七月二日、田邊太一墓誌を認め東京へ送る。

八月一日、高野山にて管長密門宥範、執事佐伯宥順と金剛峯寺に於いて英靈塔の事を相談す。奥の院に建設に取極まる。

八月十二日、京都發。二十一日、釧路に於いて鐵道記念塔建設地を見分す。二十四日、旭川に於いて去る三十三年二月北海道を去るに臨み記念として殘し置きたる帽子を見る。二十八日、小樽にて青木政德碑除幕式參列。

九月二十五日、秀雄追想錄印刷出來す。

十一月七日、京都市開催の上水協議會京都市名譽顧問として出席す。二十七日　立太子御宴に陪す。三十日、京都十七日會長に推薦さる(大森府知事東京轉任に付後任)。

大正六年　1917　五十七歳

二月二日、工學會にて述べし明治工業史に關する筆記を訂正して同會へ返送す。

三月二十四日、鐵道院新ダイナモメーター、カー、沼津山北間の試驗に付行く。

七月一日、古市工學會長より明治工業史編纂委員長に推薦の由申來る。十八日、東京帝國ホテルにて明治工業史編纂最初の委員會を開き、委員長となる。二十四日、京都市役所に於いて永田技師其の他と疏水增水問題（百個增水取入）の件に付協議。二十五日、青野兵庫縣知事より依頼により海岸屈壞の調査をなす。三十日、釧路公園に建設する記念塔書類を町長林田氏へ送る。

八月四日、北陸にて境川水力、小瀧川水力を見る。

九月三日、神戸海岸屈壞理由及び其の防禦方法を縣廳に於いて知事に說明す。

十月八日より工藤會一郎氏來宅して琵琶湖疏水史編纂を始む（翌大正七年六月完成す）。二十一日、片山危篤との事に付東上す。

二十三日、正三位勳一等工學博士片山東熊逝去す。

十一月八日、岳母（北垣種子逝去）。十日、聖上陛下大學御臨幸。十五日、皇后陛下京都上水臺覽に付御說明のために出頭。

十二月一日、浦賀入港ペルリ一行の水兵の一人ハーデー老人京都圖書館に來り先年寄附したるペルリ來國の大圖 Crossing the Rubicon 及び所有のペルリ報告書へ署名せり。二十三日、御大典朝集所を大學に賜りたるに付改築をなし入口に掲ぐる（高二尺五寸巾六尺）の額面へ「大教場」と書す。二十八日、紫野大德寺へ靜と同行す、靜書の心經大幅を同寺に納むるためなり。

大正七年　1918　五十八歳

一月二十六日、工學會總會にて明治工業史進捗模樣を述ぶ。

四月十一日、願により工科大學長を免ぜらる。

五月十八日、東京靑明治工業史幹事會を開く、其の寄附金五百圓を皆納す。二十七日、神戸市街鐵道問題に付勝田市助役來り意見を問ふ。

六月六日、朝永教授來宅、市會議長柴田氏より余を京都市長に推選せんとの談あり、辭する旨を同教授に述ぶ。二十一日、皇后陛下へ獻上の疏水鳥瞰圖及び飛瀑圖を大森太夫に差出す。

七月一日、主計同志社大學卒業其の後三井銀行入社。二十一日、兩皇子殿下疏水臺覽、御案内をして舟にて疏水を下る。二十七日、北海道釧路記念塔土臺工事費として金五百圓を町長林田氏へ送金す。

九月一日、主計三井銀行外國課勤務と決す。五日、工師必携十六版出來す。十日、叙從三位。多聞東京工科大學入學のため東京へ行く。

十月六日、ダイヤー先生死去に付大阪毎日新聞へ先生の記事を出す。

十一月九日、十日、十一日、伏木高岡間の運河檢分の依頼を受け井上知事等と共に實地を見る。

大正八年　1919　五十九歳

一月二日、小瀧川水力調査の事に付原氏來る。二十五日、工學總會にて出席明治工業史編纂委員長會として報告書を讀む。

二月六日、京都市區改正委員會臨時委員被仰付

三月十四日、全國衞生博覽會評議員囑託(京都)。

四月十八日、大正元年生ヒマラヤ杉一本を土木工學教室中庭へ寄附植付す。

五月十九日、皇后陛下盲啞院行啓、民草御前奏樂。

七月十一日、伏見洪水防禦調書出來。十二日より二十四日迄有馬滯在、著書取調ふ。

八月一日、箱根强羅に新築せし別邸出來につき九月末日迄滯留して研究報告を取調ふ。

九月三日、蓮舟遺稿上梓出來す。四日、鐵道院にて下關海峽ボーリングの件を協議す。

十月二十六日、都市計畫のため市内を檢分す。

十一月十八日、明治工業史幹事會へ列席。鐵道院にて下關海峽地質試驗成績を見る。

十二月六日、市公會堂に於いて第一疏水開通三十年記念式及び殉職者追弔會。京都市より彰功狀及び銅製像置物を贈らる。

大正九年　1920　六十歳

一月十五日、工師必携十七版を訂正して丸善へ送る。二十四日、工學會總會に於いて明治工業史編纂會の模樣を報告す。

二月九日、大井、日比、大藤三氏來宅還曆祝賀一條に付相談あり。

三月三十日、さし子京都府第一高等女學校卒業の後ち、東京聖心女學院へ入學。

五月二十四日、明治工業史幹事會。

七月一日、都市計畫京都地方委員會委員被仰付。十二日、東京にて明治工業史幹事會の後箱根に行き八月末迄滯留し著述に從事す。

八月十七日、高野山へ奉納の紺地金泥般若波羅密多心經書幅出來す。

十月九日、東京行明治工業史幹事會。

十一月六日、著書琵琶湖疏水誌出版。八日、京都府水電事業調査を囑託さる。

十二月九日、明治工業史造船部完成し其の淨書を送り來る。十六日、工學へトンネル内の空氣の事を書き送る。二十四日帝國學士院へ著書琵琶湖疏水誌一部を贈る。

大正十年　1921　六十一歳

一月二十五日、明治工業史幹事會。二十七日、熱海線トンネルで空氣試驗を試みるべく鐵道院にて協議す。二十八日、工學會總

會明治工業史の報告をなす。

四月十一日、亮吉慶應義塾大學經濟學部入學。

四月二十日、年俸五百圓加賜。二十八日、第一炭化酸素試驗着手。

五月五日、鐵道協會評議員當選(初會以來の引續也)。

六月二十四日、多聞東京帝國大學工學部(機械工學科)卒業の上更に同法學部入學。

七月八日、京都府廳にい於て都市計畫委員會開會年度割其の他各線決定す。十二日、丸善株式會社へ著書「とんねる」原稿を渡す。直ちに出版に取掛る。八月末迄箱根に滯留し著述に從事す。

八月三十日、北海道記念塔用の書を認む。

九月十五日、鐵道時報五十年記念號へ寄稿す。

十月三日、疏水田邊橋命名の話あり。十二日、下鴨へ田邊博士紀功の碑を建てることにつき京都府内務部長より話あり。十四日、日本鐵道開通五十年祝典式參列のため上京。二十九日、南大阪電氣鐵道會社線を巡視す。

十一月二日、工師必携十八版出來す。十七日、明治工業史幹事會のため東京に行く。二十九日、舊曆十一月朔日に相當す。還曆。

大正十三年五月十五日印刷
大正十三年五月二十日發行

非賣品

京都市上京區丸太町東洞院東入
著者　西川正治郎

京都市上京區東洞院竹屋町南入
發行者　山田忠三

京都市下京區北小路新町西入
印刷者　須磨勘兵衛

京都市下京區西洞院七條南入
印刷所　內外出版株式會社印刷部

田邊朔郎博士
六十年史

謹啓陳者本書は安藝博士外四名の方々より恩師田邊朔郎博士へ呈上致されたるものにて其の上梓手續中に偶々關東の大震火災に際會し原稿の一半も終に燒失するの不幸に立至り候其後編者の努力により之を回復することを得て此程漸く完成致候に付博士還曆祝賀の際御配意被下候各位の淸覽に供し候間御受納被下度候尙又他日後篇編輯のときの助とも致度候間博士に關する記事にして記載可然と御感想のものも御座候はゞ御送被下度奉願候　草々頓首

大正十三年四月

有志總代

山田忠三
京都市上京區
東洞院竹屋町下ル

殿

頁	行	誤	正
目次三	六	工時事代	工事時代
一一	一四	過の	過度の
本文一五	三	祇候	祇候
二五	三	前將軍慶喜	德川宗家
三〇	一	華盛噸	華盛頓
七五	一五	拇	柄
一一四	一四	Whic	Which
一二三	一〇	効業	功業
一四一	五	矯矢	嚆矢
一五七	一〇	概	慨
一五七	一〇	博士	博士
一六七	一一	剛恢	剛腹
一八〇	一〇	目働結機	目働聯結機
一八二	一五	底に	低き
一八六	一一	盡スシ	盡スチ
一九二	四	二三	二三を
一九四	一六	建設並に	四字削除

頁	行	誤	正
二〇〇	九	嚴	巖
二二四	五	紀	記
三一一	九	斟	勘
三一九	五	Un ver	Univer
三五六	五	右	右
三八〇	一二	經	に
三八八	四	狗	殉
三九五	五	任	仕
四〇七	一三	遣	遣
四〇八	一〇	譯	釋
四三三	七	趣	趣
四五一	八	亦	味
四五七	一三	遣	頗
四五九	一一	遂	遣
四七六	八	祝	祝
附錄九	二	鐵	鐵
二九	四	水	水
三二	一四	トンネル日	トンネル（日